

聖書:ルカの福音書13章10~21節

説教:神の国

はじめに

私はかつて、最期は死ぬことが決まっているのに、それでも生きる意味があるとは思えなくて悩んでいたことがありました。それがあるとき聖書に出会い、人は死んで終わりではなく、信じる者はやがて神の国に迎え入れられていくことを知り、そこで初めて生きることを意味を教えられ、目の前がパッと明るくなった気がしました。信仰の大先輩たちも、天の故郷である神の国を仰ぎ見ながら地上では旅人であり、寄留者であると告白していたとヘブル書に書かれています。

このように私たちにとって大切な神の国ですが、いったいどのようにして実現していくのか。目に見えませんかからわかりにくい。そこでイエスは今日の箇所ですととで説明してくださっています。ここにどのような恵みがあるのか。ご一緒に聖書の語りかけに耳を傾けてまいります。

## 1 安息日

### 1) 「病から解放されました」

イスラエルに行くと、二千年前の石造りの会堂が今も残っていて、見学できます。中に入るとちょうど公民館のような広さで、壁の両脇には野球場にあるような階段状になったベンチが作り付けで備えられていました。イエスもそのような会堂で安息日に教えておられたのでしょうか。そんなあるとき、十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、まったく伸ばすことができない女性がやって来ます。イエスは「女の方、あなたは病から解放されました」と宣言し、手を置かれると、たちまち腰はまっすぐになり、病が癒やされ、この女性は神をあがめていきます。

### 2) 「安息日にはいけない」

そこまではよかったのですが、ここで安息日について大きな論争が持ち上がります。安息日とは何か。そのことは出エジプト記20章8~10節前半に出てきます。「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。」

しかしどんな仕事をしてはいけないのか、詳しく書かれていない。そこで当時、パリサイ人、律法学者と呼ばれる人たちが、安息日にしてよいこととし

てはならないことを細かく規定し、それを守るように人々に教えていました。例えば、火を使ってはならないとか、一キロメートル以上歩いてはいけないというのがあり、いのちに関わるような怪我や病気は別にして、そうでない場合は治療をしてはならない、ということがあった。14節で会堂司が文句を言っているのは、このような事情があるからです。

### 3) 「ほどく」と「解放する」

これに対してイエスは15節でこう言われます。「偽善者たち。あなたがたはそれぞれ、安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほどき、連れて行って水を飲ませるではありませんか。」

ここでイエスは二つのことを言っています。一つ目。律法学者たちの決めた安息日規定によれば、牛やろばに水を飲ませるのは許されている。牛やろばでさえ水を飲めるのに、どうして人を治療してはいけないのか。

二つ目。牛やろばを水飲み場に連れて行くためには、まず飼葉桶につながれた紐をほどかなければなりません。それだけではなんのことかと思うでしょう。十八年間腰が曲がったままの女性にイエスは語りました。「あなたは病から解放されました。」この「解放する」が「ほどく」と同じことば。これがポイントです。家畜である牛やろばでさえ安息日でも飼葉桶に結んでいた紐から解放される。それなのに、どうしてアブラハムの娘（救われるべき大切な人間という意味）が病から解放されてはならないのか。イエスはそのように言っているのです。

### 4) 恥じ入った

これを聞いていた群衆は、なるほどそのとおりと納得し、「イエスのなされた輝かしいみわざを喜びます。一方、それまで「反対していた者たちはみな恥じ入った」と書かれています。この、「恥じ入った」ということばは少し注意が必要です。

例えば、学校で先生から質問されたのに、答えられずにもじもじしていらしたら、クラスのだれかがクスクス笑うことがある。そのとき感じるのが、「恥じ入る」という感情です。問題はその後です。ある人は反省して、しっかり勉強してこなかつ

たと思うかもしれない。しかしある人は、自分を笑った子を憎むかもしれない。「恥じ入った」と聞くと、悔い改めたかのように思ったりしますが、そうとは限らない。自分たちに恥をかかせたイエスを恨んでいった可能性がある。このことはまた後で触れることになります。

## 2 神の国のたとえ

### 1) からし種とパン種

こんな騒ぎがあってから、イエスは神の国について、からし種とパン種のたとえをします。からし種は非常に小さなものですが、時間が経つと大きな木に育ち鳥が巣を作るようになる。パン種もごくわずかな量でパンの生地全体をふくらませるくらいの力を持つ。神の国はこれとよく似ていて、最初は小さくて目立たないけれど、やがて大きくなり誰もが目で見てわかるほどの大きなものになっていく。そんなことを言っている。

でも、すっきりしないことが二つある。一つ目。どうして、木の枝に空の鳥が巣を作ると言ったのか。育った木がどれほど大きいものであるかがわかるようにするためと言われれば、それまでですが、でもそれならもっと別の表現をしてもよきように思います。

すっきりしないことの二つ目。パン種と言えば、聖書ではほとんどの場合、良い意味では使われません。それなのに、どうして神の国のたとえとして使われるのか。そこがすっきりしません。

### 2) 詩篇104篇

一つ目の疑問から。結論から言うと、旧約聖書が関係している。詩篇104篇10,11,12節と16,17節を開いてみます。「主は泉の水を谷に送り 山々の間を流れさせ 野のすべての獣に飲まされます。野ろばも渴きを癒やします。」「主の木々は満ち足りています。主が植えられたレバノンの杉の木も。そこに 鳥は巣をかけ こうのとりは もみの木を宿とします。」

今日の箇所と比べてみてください。イエスがなぜ、牛やろばに水を飲ませることを取り上げたのか、どうして空の鳥が巣を作ると言ったのか。決して偶然ではない。読んでみると分かるのですが、詩篇104篇は罪人も悪い者もない世界がどれほどにすばらしいかを喜んでいる歌です。それはまさに神の国そのものと言ってよい。木の枝に鳥が巣を作ると語ったのは、こんな理由があったから。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 偽善者たち

では、もう一つの疑問。なぜイエスはパン種を使って神の国のたとえ話をしたのか。反対する者たちに対し、イエスは何と語ったか。15節。「偽善者たち」です。そこが鍵になります。なぜ偽善者と呼ばれたのか。安息日を守ることによって、自分たちは神の前に義とされると彼らは思い込んでいます。ところが、アブラハムの娘が病の霊につかれて苦しんでいるのに、安息日だからダメだと言って助けようもしない。誰が見ても矛盾していることなのに、自分ではまったく気づかない。それが「偽善者」と呼ばれる理由です。

そんな彼らは、イエスのことばを聞いて恥じ入りました。問題はその後です。反省して悔い改めたのか、それともますます腹を立ててイエスを憎んでいったか。もし彼らがここで反省し、悔い改めたのなら、イエスは「偽善者たち」と呼ばなかったでしょう。「偽善者たち」は、大恥をかかされ、プライドをひどく傷つけられたことに腹を立てて、イエスに激しい敵意を抱いていくのです。

### 2) おおわれているものが現されていく

12章1, 2節でイエスは警告していました。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。」

もし安息日にイエスが病の霊につかれた女性を癒やさなかったなら、会堂司たちの心の内に隠している偽善は表に出てこなかったでしょう。ところが、いま、彼らの偽善が暴かれてしまいます。隠されていたものが、白日の下に露わにされていきました。

### 3) 神の国に戦いを挑む勢力

こうして見てくると、神の国のたとえになぜパン種を持ちだしたのかがわかってきます。神の国が、からし種のように成長するとき、隠されていたものが現れ、偽善と呼ばれるパン種が粉全体をふくらませて戦いを挑んでくるのです。神の国は、なにもなくても自動的に実現していくようなものではないのです。偽善者に代表されるような人の罪との戦いがある。イエスが私たちのところに来られたとき、言われました。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ1:15) 神の国が私たちのところに近くなればなるほど、隠されていた私たちの罪も露わにされます。そこで罪を認めて、救いの福音を信じるのか、

それとも罪を認めようとせず、かえってイエスを憎み殺そうとするのか。私たちはいつかどこかで必ず問われることになります。

#### 4) 十字架の死と復活

神の国を代表するからし種、そして偽善者たちを代表するとパン種。この二つの戦いの結果はどうなったか。パン種と呼ばれる、パリサイ人、律法学者たちは、イエスを逮捕し、裁判にかけ、十字架でつるしていきます。この方が十字架で死に、墓に葬られた時、誰の目にも神の国は完全に敗北し、パン種が勝利して、からし種は風に吹き飛ばされて跡形もなくなったかに見えた。

しかしこの方は三日目に死からよみがえられます。そのとき初めてわかった。からし種は消えてなくなったのではない。土の中でりっぱに大きくなり、空の鳥が巣を作るまでに成長していた。十字架の先にあったのは死ではなく、詩篇104篇に書かれていたような神の国の光景でした。そこにはもはや罪はなく、悪しき者どももいなければ、私たちを苦しめていた死というものがない。そここそが、私たちが仰ぎ見ている天の故郷、神の国なのです。

たとえ今、私たちが病に苦しみ、先の見えないような不安にあっても、たとえ自分のいのちを奪おうとして襲ってくる者があっても、誰もこの希望を奪うことはできません。なぜなら私たちの救い主イエスが、十字架でいのちを捨て、罪の身代わりとなってさばきを受けられ、死からよみがえられたからです。私たちが苦しめていた死は、もはや私たちの敵ではありません。主が打ち勝ってくださいました。

私たちはやがての日に神の国に迎え入れられ、この主イエスの輝かしいみわざを見て喜ぶことになります。その日を待ち望みつつ、地上の生涯を歩んでまいりましょう。